

なぜポスト・カント論理哲学を再評価するか

岡本賢吾 (Kengo OKAMOTO)

首都大学東京

企画趣旨に基づきながら、特に、次のようなテーゼを提起して、その説明と正当化を可能な範囲で行いたい。

[ポスト・カント論理哲学の基本課題に関するテーゼ]： カント哲学の登場によって初めて多くの人が感知できるようになった、論理哲学上の二つの基本的な問題——ポスト・カント論理哲学の基本課題——が存在している。(1)その一つ目は、概念(論理)の時間化(様相化)はいかにして可能か、という問題、(2)二つ目は、シンボル(言語)からいかにして構造(状況)を構成しうるか、という問題である。

(1)の問題は、i)カント解釈の世界では、例えば特にハイデガーが強調した問題としてよく知られていよう。しかしそれが、現代的な論理哲学にとっても重要な問題であることはほとんど気づかれていないように思える。ii)他方、現代論理学だけを見れば、論理の様相化・時間化が、まさにこの半世紀を通じた(現在も進行中の)プロジェクトに他ならないことは誰でも知っている。しかしそれが、基本的にはポスト・カント論理哲学が突きつけられてきた課題に対する一つの回答の形態であることは、あまり自覚されていないだろう。そこで本提題では、以上の i)と ii)のギャップを適切に埋めるためのいくつかの所見を提起したい。

(2)の問題は、現代論理学の側から見れば、おそらく容易に首肯できるものである。すなわち、ストーン双対性や、あるいはもっとよく知られたところでは、ヘンキン流の証拠定項を用いた一階述語論理の完全性定理の証明などを思い起こせば、それがまさに“言語からの構造の産出”と見てよいものであることは、あまり問題なく認められるだろう。しかし他方、カント哲学の中にこうしたテーマを読み込むことには、かなりの抵抗があるかもしれない。これに対して本提題では、次のように論ずることで——すなわち、「いかにしてシンボルから状況を構成しうるか」という問題は、ウィトゲンシュタイン及びカッシーラーが、それぞれ独立に取り組んだと言ってよい問題であり、そのように彼らがこの問題に取り組んだのは、まさにカントの問題提起を(どれほどその自覚があったかはともかく)受け継ぐ形ことによってだった、という点を示すことによって——回答すべく試みたい。